

## 解 題

西部 忠

### 1) 本書の現代的意義

いまから一世紀も前に、ヴェブレンは「なぜ経済学は進化的科学ではないのか?」という論文で、力学的機械論ではなく生物学的進化論に基礎をおく進化経済学の構想を提示している。その後、マーシャルも『経済学原理』第五版序文に「経済学のメッカは経済生物学である」という有名な文章を書き記している。しかし、その後の経済学は、ヴェブレンのいう進化経済学でも、マーシャルのいう経済生物学でもなく、均衡経済学ないしは経済物理学の方向へと進んできたといってよい。現代主流派である新古典派経済学は、それを基礎づける公理主義、還元主義、合理主義、機械論といった考え方を古典力学や熱力学などの近代物理学から導入してきた。これらは、一般均衡理論や合理的期待理論に典型的に見られる。その起源は、デカルトの主客二元論やニュートン力学にまでさかのぼることができるだろう。

しかし、現在では、数学、物理学、化学、生物学、人工知能、認知科学など自然科学の各学問領域で非平衡熱力学、カオス、フラクタル、自己組織化、オートポイエーシスといった新たな研究分野や手法が開発され、従来の還元主義的な手法によっては把握できない複雑なシステムの性質が明らかにされてきている。こうした大きな知的潮流は社会科学にも少なからぬ影響を与えている。たとえば、ルーマン社会学はその一つの成果であろう。本書の背景にも、こうした自然科学・社会科学における新たな知的潮流が脈打っている。

本書第IV部で論じられているように、経済学では、1980年代以降、最適化、決定論、還元主義に対する疑問が内在的な議論を通じて提起され、こうした経

経済学の中心に位置する概念の方法論的含意が問い直されるなかで、新たな経済学を再構築しようとする気運が高まってきた。新制度学派、ネオ・シュンペーター学派、レギュラシオン学派、進化ゲーム論、非線形動学理論などの新たなアプローチは、それぞれ異なる概念・仮定・方法に基づくものの、「制度」や「進化」の観点から経済を分析するという点で共通しており、技術進歩と経済成長・景気循環、企業・産業組織や慣行・定型行動の変化、協力・慣習の生成、組織・調整様式・経済体制の生成や再生産や進化といった主題に取り組んでいる。

ソ連・東欧の社会主義経済の崩壊や資本主義先進諸国における不況の再来を経験した1990年代前半には、旧社会主義国の市場経済化やアメリカ経済の復活といった事実から、規制緩和や行財政改革などの自由主義的な資本主義経済が唯一存続可能で効率的な経済システムであるという、市場原理主義が声高に主張されてきた。しかし、通貨危機や金融脆弱性に特徴づけられる1990年代後半には、このような見方を是正すべきだという意見も多く聞かれるようになった。21世紀に入り、市場原理主義やグローバル資本主義への懐疑や批判はますます強まってきている。経済学はいま、市場経済がきわめて複雑な制度により支えられており、時にきわめて不安定なシステムであること、また、さまざまな諸制度の複合体である資本主義経済にもきわめて多様な存在様式がありうるということを経験的に認識しつつあるといえよう。

経済学における地殻変動は、欧米とは事情がいささか異なる日本でも起こっている。1990年代後半以降、進化や複雑系といったテーマが注目されるようになり、これらを主題とする著作が次々と出版された。1997年には「進化経済学会」という新たな経済学会が設立された。これまで日本の経済学や経済学会は、「近代経済学」と「マルクス経済学」という大枠により二分されており、棲み分けを続ける両者の間にはほとんど生産的な議論も論争も交わされてこなかった。しかし、「多元主義 (pluralism)」を共通理念として発足したこの新しい学会には、経済学の現状に批判的な多くの研究者が従来の学派区分を超えて理論・応用・学説史・思想史の各分野から参加している。しかも、他の社会科学や自然科学の分野からの参加者も少なくない。

進化経済学は「進化」や「制度」をキー概念としているといったが、これらの概念の意味や内容は各アプローチごとに、さらに各研究者ごとにも異なっ

ているのが現状であって、進化経済学に対する統一の定義や共通の理解が必ずしも得られているわけではない。進化経済学会が編集した『進化経済学とは何か』(有斐閣、1998年)に付せられた瀬知山敏氏の「はじめに」によれば、進化経済学とは、時間と空間に関する新しい認識に基づいて、経路依存性、非線形性、慣行(ルーティン)、不確実性、サーチ、推移確率、突然変異などの諸属性を持つシステムを研究する学問である、という。進化経済学を特徴づける、従来とは異なる諸概念としては、さらに分岐、創発性、カオス、複雑さ、内部観測を挙げることができるだろう。また、同書のヴィット論文(第2章)の整理によれば、進化経済学は、自然選択を経済学に直接適用しようとする立場(進化ゲーム論やハイエクの社会哲学)と、自然選択を経済学で隠喩的に利用しようとする立場(ボールディング、メトカフェ、ホジソンなど)に大別される。しかし、ヴィット氏自身はこれら双方に批判的であり、経済進化には遺伝子機構に相当する不変の構造がない以上、自然進化に比べてはるかに複雑であると主張している。このように、「進化経済学」は、新たな時間・空間認識と新たな諸概念から制度や進化を理解しようとする多くのアプローチを内包しており、そこに単一の体系的理論や方法論が存在しているわけではないのである。

ホジソン氏は、こうした現状を認識しつつ、「進化」概念の多義性という問題に正面から取り組むことを自己の課題と考え、進化概念を分類・整理したうえで、進化経済学はどのような進化概念を採用すべきかを明確に提示している。だが、ホジソン氏の周到的議論にもかかわらず、進化概念による各経済学者の分類に対しては少なからぬ異論が出されている。進化概念に関する共通理解を築くことのむずかしさは、依然として残っているといえよう。

このことは果たして進化経済学の短所と見るべきであろうか。そもそも「進化」概念が注目されたのは、厳密で明確な定義や公理から出発し、演繹的に諸命題を導出していく、従来の公理論的アプローチが「現実性」や「実在性」をなおざりにして、その論理的な首尾一貫性や形式性のみに焦点を当てすぎたからではなかったか。そうならば、われわれは、この進化の「多義性」を、経済科学としての厳密性や明証性の欠如として否定的にとらえるべきではなく、理論の多様性と多産性を生み出す源泉として肯定的に理解すべきではなかろうか。

ここで、「進化経済学」が二重の意味を持っていることに留意しなければならない。すなわち、ここで「進化」が形容しているのは「経済」であると同時に「経済学」でもあるということである。

まず第一に、「進化経済学」とは「進化する経済の学」である。複雑性と不確実性により特徴づけられる大規模な経済社会は、市場原理や計画原理のような単一の経済原理により構成されているわけではなく、多様な経済体制・制度・組織の競争と共生の結果として、すなわち経済的進化過程の結果として現存している。これをホジソン氏は『経済学と制度』で「非純粋性原理 (impurity principle)」と呼んでおり、本書でもしばしば言及している。この原理によれば、経済は、従来の経済学が提供している、市場か計画かという調整原理や、ルールか裁量かという政策原理における二分法的な認識枠組みによっては理解することができない。方法論的个人主義は、経済システムを原子的個人の単純な意思決定・行動原理から構成できるものとみなしてきた。だが、経済主体は、不確実性、情報の不完全性、情報処理能力の限界がある状況では、選択にとまなう負荷を軽減するためにルーティン（定型行動）や習慣・慣習に依拠せざるをえない。しかし、それだけではない。経済主体による環境の認知過程は、そもそも認知や解釈の枠組みを前提としているが、その枠組み自体も社会的な文化や制度における学習や活動により可能になっている。しかも、思考と行為のプロセスは、習慣や反射に基づくレベルから、熟慮と計算によるレベルまで、複雑で多層的に構成されている。経済は全体として社会的・政治的・文化的諸制度から分離不可能なのであって、われわれははじめから経済を「社会・経済システム」として考察する以外にはないのである。制度は、人々の持続的で定型的な行動パターンを生み出す社会的仕組み・枠組みであり、これが「社会・経済システム」を一定のシステムとして分析することを可能にしている。それゆえ、進化経済学が要請されているのは、大規模な経済をそのなかで多様な諸制度が競争・共生しながら進化する過程としてより現実的かつ実在的に記述するためであり、また、大規模な経済を構成する諸制度をいかなる倫理やルールに基づいて設計構築していくかを提示するためなのである。

第二に、進化経済学とは「進化する経済学の学」という意味で、「メタ経済学」でもある。経済が進化していくならば、経済学という学問分野もまた、現実の

経済や他の社会科学や自然科学の諸分野の学問との相互作用と共生関係のなかで進化していくはずである。このことは経済学がある一時点において支配的パラダイムや正統的理論によって席卷されるという事態を必ずしも意味しない。経済学の歴史を見れば、19世紀の古典派経済学や20世紀の新古典派経済学といった各時代の支配的パラダイムといえども、その他の諸学派を完全に淘汰してしまうわけではないことは明らかである。経済学を含む社会科学では、単一の支配的パラダイムが他の単一の支配的パラダイムにとってかわられるような革命的・非連続的な転換はむしろまれであり、複数の諸研究プログラムが常に競合し、相互に盛衰を繰り返しながらも、連続的・漸進的に共生進化する。この経済学における「多元主義」は、社会科学の非厳密性・非論理性がもたらす後進性として否定的に理解すべきではない。経済学の進化では、生態学的な多元性や多様性は、新たな理論の創造を可能にする創発性や豊饒性の源泉と考えられるからである。

本書が着目するように、この点で大きな役割を果たすのは、厳密な定義や論理による形式的演繹ではなく、むしろ「メタファー（隠喩）」や「アナロジー（類比）」の力である。メタファーやアナロジーは、単なる文飾や文学的修辞と見るべきではあるまい。たとえば、「市場」、「競争」、「資本」、「価値」といった経済学の基本用語は、経済理論の全体構造を支える本質的な含意を担っている。こうした用語の意味は理論内部で明確に規定されているように見えても、それらは、しばしば多義的で曖昧である。それゆえ、こうした概念は、経済的な事象や実在物に関する定義ではなく、一種のメタファーと見なければならない。もちろん、一般にこのことはその使用者によって常に自覚されているわけではないので、ある概念が担いうる意味の多義性や不定性は、その理論のなかにおける他の諸概念との関連においてだけでは必ずしも明らかにならない。むしろ同じ概念の他の理論における使用法や意味を参照し、両者を類比的に理解することから明らかになる場合が少なくない。たとえば、社会主義経済計算論争における「競争」や「市場」、資本論争における「資本」の意味は各学派・各論者間で実際には異なっていたが、その多義性は論争におけるその概念の意味と使用をめぐる討論（コミュニケーション）を通じて明らかにされた（前者の論争については、拙著『市場像の系譜学』東洋経済新報社、1996年を参照された

い)。このように、諸概念の意味論的な多義性や文脈依存性は、各研究者、各学派・アプローチごとの意味と使用の相互比較を通じて産出されると考えることができる。このように、進化論的な方法論＝メタ経済学は、諸概念の意味論的な変異や種差を系統発生的進化の観点から肯定的に認識する。進化経済学が標榜する多元主義とは、諸学派の競争と共存を可能にし、経済学を豊穰化させるための一般的条件と見なければならない。それは、アカデミズムにおける専門家集団の独善主義や閉鎖主義をその内部から打開する革新的担い手の存在を許容するような「開放性」を意味しているのである。

本書は、現代までの著名な経済学者が進化概念をどのような意味で用いてきたのかを改めて問い直し、それらを分類・整理することを通じて、進化経済学の哲学・方法・概念上の基礎を築こうとする意欲的な試みである。経済学の基本的枠組みそのものが根本的に見直されている欧米の経済学界では、本書は、進化経済学を広範にサーベイする基本文献として多くの読者を獲得している。進化経済学に対する関心が高まっている日本でも、同様の役割を果たすものと期待したい。

## 2) 著 者

本書は、Geoffrey M. Hodgson, *Economics and Evolution: Bringing Life Back into Economics*, Blackwell Publishers, 1993の全訳である。原書はハードカバー版で出版されたが、翌1994年にはペーパーバック版が出ている。本書が「進化」を主題としていることを強調するために、原題での「経済学」と「進化」の順番を逆にして、書名を『進化と経済学：経済学に生命を取り戻す』とした。副題は、二重の意味を持つ掛詞になっている（このことはホジソン氏にも確認した）。第一に、それは、経済学が物理学の力学的メタファーではなく、生物学的メタファーを再び採用すべきであるというメッセージを意味し、第二に、そうすることで経済学を再生すべきであるというメッセージを意味する。本書の主題は、いかに経済学に生命・生物という主題を回復し、危機状態にある経済学の生命を回復するか、にある。この点を考慮して、本訳書の副題には「せいめい」とも「いのち」とも読める「生命」という言葉を使った。「日本語

版への序文」は、私が本訳書のためにホジソン氏にお願いして付していただいた。原書はその出版後、何人かの経済学者から批判を受けたが、この序文では、それらに応答しつつ、「進化」概念の多義性を改めて強調し、それらに対する反批判を展開している。

原著者のジェフリー・ホジソン氏は、ヨーロッパ進化政治経済学会(European Association for Evolutionary Political Economy)の会長を歴任している。現代進化経済学の第一人者として欧米のみならず、いまや日本でも有名である。制度経済学と進化経済学の発展のために、学会活動、研究・編集活動、教育活動、大学制度づくりなど、実に多面的に貢献している。

ホジソン氏は、1980年代後半以来、経済の制度と進化について一連の著作を精力的に発表してきた。日本では、『経済学と制度』(*Economics and Institutions*, Polit Press, 1988)がすでに『現代制度派経済学宣言：経済学と制度』(八木紀一郎他訳、名古屋大学出版会、1997年)として邦訳されている。ホジソン氏が本書「まえがき」で述べているように、前著と本書は「制度」と「進化」を主題とする「姉妹編」とでもいうべき相互補完的な関係にある。それゆえ、これら二著を通して読むならば、ホジソン氏の経済学研究の成果を体系的に理解することができるであろう。

ホジソン氏については、上記の『現代制度派経済学宣言』「訳者解説」で詳しく紹介されているので、ここでは、彼の最近の研究や経歴について紹介しよう。

ホジソン氏は、「日本語版への序文」でみずから述べているように、1999年に『経済学とユートピア』(*Economics and Utopia*, Routledge)と『進化と制度』(*Evolution and Institutions*, Edward Elgar)という二冊の新著を発表した。これらは、先の「姉妹編」での制度経済学と進化経済学に関する検討を踏まえ、さらに経済社会や経済学の「進化」を展望するものである。

『経済学とユートピア』は、経済理論や経済学説史における議論からさらに一步踏み込んで、経済社会のありうべき将来について考察している。われわれは、公的所有と中央計画に基づく集権的「社会主義」の幻想から目覚めなければならないにせよ、「歴史の終焉」論のように将来へのヴィジョンをすべて否定してしまえば、倫理的な空虚に陥らざるをえない。ホジソン氏は、左右両翼が考える静的なユートピアではなく、多様な制度に支えられながら、学習によ

り知識や制度が進化していくような動的な「エヴォトピア (evotopia)」を構想すべきだと主張している。

これと対照的に、『進化と制度』は、一学問分野である経済学の20世紀における「進化」を回顧し、今後の経済学のあり方を構想している。ここでは、経済学における多元主義が説かれ、思想や理論のみならず、歴史研究やケース・スタディの重要性が指摘されている。ホジソン氏は、21世紀の経済学は制度経済学と進化経済学の総合へ向かうであろうと予想しているようである。

ホジソン氏はまた、以上のような自らの研究活動のかたわらで、制度経済学や進化経済学における基本文献リーディングスや事典を多数編集してきた。制度経済学では『制度の経済学』(*The Economics of Institutions*, Edward Elgar, 1993)、進化経済学では『経済学と生物学』(*Economics and Biology*, Edward Elgar, 1995)、『進化経済学の基礎: 1890~1973年』(*The foundations of Evolutionary Economics: 1890-1973*, 2vols, Edward Elgar, 1998) というエドワード・エルガー社の参考文献コレクション・シリーズが挙げられる。また、制度経済学と進化経済学の概念や関連する経済学者を解説した事典『制度・進化経済学のためのエルガー・コンパニオン』(*The Elgar Companion to Institutional and Evolutionary Economics*, 1994) には、編集者の一人として参加している。

ホジソン氏は、1992年以来ケンブリッジ大学のジャッジ・インスティテュートで教育・研究活動が続けてきたが、1999年1月にケンブリッジ近郊にあるハートフォードシャー大学 (the University of Hertfordshire) のビジネス・スクールへ転出した。彼の尽力により、1999年9月より同研究科には、新・旧制度経済学、進化経済学、経済学方法論をカバーする「制度経済学」のための修士課程コースが新たに設置された。ホジソン氏は、そこで制度経済学と進化経済学についての講義を担当し、指導的役割を果たしている。「制度経済学」を専攻とする修士課程コースは日本には存在しないが、ヨーロッパでもはじめての試みとのことであり、企業、国家、市場、家族などの経済生活の諸制度に焦点を当てた総合的な研究の展開が期待されている。何人かの日本人研究者がすでに同大学で在外研究を行ったと聞いている。

### 3) 本書の特徴

本書の主題は「経済学と進化」である。このことは意味深長である。

進化とは、一般にダーウィンによって確立された生物学の概念であると考えられているけれども、ことはさほど単純ではない。ダーウィン自身がマンデヴィル、ヒューム、スミス、マルサスらの経済学の影響を受けていたし、社会科学ではその後スペンサー流の進化概念が普及した。進化といってもダーウィン主義とラマルク主義、さらにスペンサー主義は区別されなければならない。それゆえ、本書が対象にしているのは、進化概念の経済学への適用というよりも、進化概念をめぐる経済学と生物学の相互作用による「進化概念の進化」であると考えなければならない。経済学と生物学の関係は、まず18世紀の経済学がダーウィン進化論に影響を与え、そしてその後19世紀の経済学がそれにより影響を受けるという交錯したものである。経済学は「進化」を単にメタファーとして利用しているだけでなく、その形成に実質的にもかかわっている。

本書はまた、経済学における進化論の諸類型を確定することを目的としている。このため、さまざまな経済学者がどのような「進化概念」に依拠していたのかを分類・比較し、そのうえで、現代生物学から最新の知見を援用しつつ、どのような進化概念を経済学では採用すべきかを提示している。ホジソン氏は、マンデヴィル、ヒューム、スミスなどスコットランド啓蒙思想やマルサスがダーウィンにいかなる影響を与えたかを考察することからはじめて、マルクス、エンゲルス、スペンサー、マーシャル、メンガーといった19世紀の経済学者や、ヴェブレン、シュンペーター、ハイエクといった20世紀の経済学者が「経済的進化」という概念を自己の理論のなかでどのような意味で用いたか、それはどのようなインプリケーションをもつものかを丹念に吟味している。

だが、本書を、単に「進化」という目新しい概念を切り口にした、もう一つの経済学説史・経済思想史とみなすべきではない。ホジソン氏は、経済学が今後どのような方向へ発展していくべきかという問題関心から、各経済学者のいかなるヴィジョンが彼らの「進化」概念に反映しているかを探ろうとしているからだ。第II部と第III部ではたしかに編年史的な叙述スタイルをとっているも

の、特に第IV部に見られるように、本書はあくまでも前著『経済学と制度』と同じような概念構成的な記述を貫いているのである。だが、本書は前著のように、新古典派経済学批判に多くの紙幅を費やしてはいない。それは、ホジソン氏が述べるごとく、「本書の主要な目的は、理論の再構築という課題のための土台を引き続き切り開き、この課題にとって適切で、しかも手に届くところにあるツールを考察することにある」（本書まえがき p. x）からであり、「過去の考えを単に理解するだけではなく、経済進化の異なる定式化の実効可能性を検討することでもある」（第2章末 p. 53）からである。新古典派経済学への批判は依然として本書の通奏低音として流れているものの、ホジソン氏は単なる批判から一步進んで、積極的理論を構築する方向を目指している。そのようなときにこそ、過去の経済学者や理論（ツール）を新たな理論の再構築のために吟味し直すことが大きな意味をもつ。前著と本書がホジソン氏により「姉妹編」と呼ばれているのは、このためであろう。

本書でホジソン氏が進化経済学の基礎として最も重要視しているのは、制度派の祖であるソースタイン・ヴェブレンである。それは、ホジソン氏の進化概念の分類によれば、ヴェブレンこそが、ホジソン氏が依拠しようとする自然選択的な進化概念、すなわち系統発生的で非完結主義的な進化概念を提示し、その進化概念のなかでの選択の単位が「制度」であることを明確にしたからである。かくして、本書は、制度をダーウィン主義的な自然選択における「選択の単位」に相当するものであり、経済学における「分析の単位」である、と進化論的に定義した点に前著からの理論的な前進があるといえよう。

とはいえ、「日本語版への序文」でホジソン氏が触れているように、スミス、マルクス、マーシャル、メンガー、シュンペーター、ハイエクたちを偉大な進化経済学者と考える研究者は、ホジソン氏がこれらの経済学者を過小評価し、進化経済学者としての名声を貶めているとして異論を唱えている。ホジソン氏がヴェブレンを高く評価する根拠は、すでに述べたように、進化概念の適切さ、選択の単位としての制度への着目における慧眼、進化経済学の構想におけるヴィジョンの卓抜さ、いい換えれば、進化経済学への理論的貢献の大きさにこそある。読者のなかにも、他の経済学者の業績はその経済理論の壮大さ、緻密さ、斬新さの点ではヴェブレン以上に優れていると考え、彼らの評価はいささか割

り引かれているのではないかと感じる方もおられるかもしれない。

ホジソン氏は、この点について次のように述べている。「スミス、マルクス、マーシャル、メンガー、シュンペーターはいずれもその思考において本質的にはダーウィン主義的ではない」、「その思考において他のだれよりもダーウィン主義的であった、ある一人の経済学者の仕事を重視しなければならないということである。それは、ソースタイン・ヴェブレンである」（「日本語版への序文」 pp. iv-v）。ここでいうダーウィン主義とは、「事前に存在する変異」の存在を認め、多様な変異を持つ個体の集合、すなわち「個体群」に基づいて進化のメカニズムを考察する立場である。「世界に多様性が存在するということを認識するだけでは十分ではない。すなわち、多様性が、進化のための燃料であることが理解されなければならない。これはまた、次のことを意味する。われわれは、多様性がいかに生み出され、補充されるかを、また、その多様性に対し選択メカニズムがいかに働くかを理解しなければならないのである」（同上）。このように、各経済学者の評価において、彼らが選択の「事前に」存在する変異を認めるダーウィン主義者か、選択の「事後に」結果として変異や複雑化が生じるとするスペンサー主義者か、あるいはそのどちらでもないかが、一つの重要な基準になっている。たしかに、このような基準と分類に基づく評価が妥当なものかについては、議論の余地があるところであろう。

しかし、ホジソン氏による分類がかりに万人が賛同するものではないとしても、それは、解釈と分類における強調点の置き方の違いに起因しているのであって、必ずしも彼の評価や判断が公正さを欠くとはいえないであろう。解釈や分類には唯一絶対のものはなく、多様な方法により可能であるので、こうした問題は、さまざまな学派や論者により議論されることが望ましいし、また、解釈や評価は批判や討論を通じて是正されることも少なくない。

ただし、ホジソン氏は、「進化」という用語を、マルサスやヴェブレンのように、非完結的・系統発生的な意味においてのみ使用すべきであり、このように使用しない他の経済学者は進化経済学者ではないと断言しているわけではない。そうではなく、反対者に批判の根拠の明確化と立証責任を要求しているにすぎない。多元主義の有意義性を考えるうえでも、この主張は注目に値する。ホジソン氏による経済学者の分類に異を唱えるものは、単に彼の分類の仕方を

問題としているのか、あるいは分類の基準である「進化」概念自体を問題としているのかを明確にしなければならない。もし後者であれば、自らが「進化」という用語で何を意味しているかを別の解釈として明示し、それによる別の分類法を提示するのでなければ、意味のある議論の展開にはならない。以上の点を自覚しないままに、自分が研究対象としている経済学者や自分が属している学派を擁護しようとすることは、生産的な討論を生み出さず、かえって感情的な対立を深めるだけである。このように、ホジソン氏の本書における議論は、多元主義的な討論が実りあるものになりうるための必要条件を提示している点でも参考になる。

本書はまた、制度についても興味深い論点を提起している。ホジソン氏は、ホワイトヘッドやケストラーの有機体論に依拠して、実在の多層的階層性を存在論的な了解としている。ここから、制度の多層性を、制度の重要な特性として抽出している。このことは、進化論の理解に対して次のような帰結をもたらす。進化論における新ダーウィン主義や「利己的遺伝子」の理論は、進化が「遺伝子」という単一のレベルでのみ生じると仮定している。しかし、現代生物学における群選択の理論が提起している問題とは、選択が多レベルで生じており、それらの複合プロセスをわれわれは「進化」と総称しているのだということである。したがって、ダーウィン主義に基づき、進化を個体群における変異の自然選択のメカニズムであると見るにしても、個人のような単一レベルのみを「選択の単位」と考えることはできない。社会・経済プロセスにおいては、多層的な制度が「選択の単位」であり、選択は多層的なレベルで同時に生じていると見なければならない。社会進化の自然選択過程で淘汰されるのは個人としての人間ではなく、国家・系列・企業・共同体のような組織や集団であり、法・慣習・ルーティン・思想のような意思決定・行動のためのルールや様式であるからだ。ホジソン氏は、これらを一括して「制度」と呼んでいるのである。こうして、制度の多層的実在論によって、社会科学へ還元主義的な進化論を適用しようとする試みを批判する基礎が与えられる。このことの経済学をはじめとする社会科学に対する含意と帰結は、ホジソン氏によってもまだ十分には汲み尽くされていない。しかし、これが今後の進化経済学にとって重要な課題であることは確かである。

最後にもう一つの特徴として挙げられるのは、経済学方法論に関する独自の洞察である。ホジソン氏は、経済学方法論でこの10年ほど話題となっているマクロスキーのレトリック論やバスカーの超越論的（批判的）実在論などを念頭におきながら、経済学や科学においてメタファーやアナロジーが積極的な役割を果たしていると見ている。メタファーやアナロジーは、まず第一に、経済学のある学派と他の学派、経済学と物理学、経済学と生物学など、異なる学派や学問分野の間を横断し、一方から他方へと概念や思考を移送するための「媒体」ないし「インターフェース」として機能する。第二に、それらは、形式化された論理の追求だけからは得られない新たな概念や思考を発見するための「触媒」あるいは、それらに跳躍するための「ジャンピングボード」として機能する。つまり、通常の科学方法論では正当な地位を与えられていないメタファーとアナロジーは、科学諸分野間の対話や科学的発見のための不可欠な要素なのである。

原著の出版後、これについてさまざまな書評や論文が書かれた。「日本語版への序文」で述べられているように、進化経済学におけるシュンペーターやマルクスの位置づけについて批判がなされ、それに対してホジソン氏が反論している。これ以外にもマーシャルについての同様の批判がある。

モスは書評論文で、マーシャルの後にも、ペンローズやローズビーなどポスト・マーシャル派と呼べる経済学者が彼の示唆に従い生物学的な議論を展開しているにもかかわらず、本書ではそうした試みを無視していると批判した(L.S. Moss, "Geoffrey M. Hodgson, *Economics and Evolution: A Review Article*," *Marshall Studies Bulletin*, 4, pp.33-49, 1994)。ホジソン氏は、紙幅の制約からポスト・マーシャル派の議論を十分に吟味できなかった事実を認めつつも、1)ペンローズは経済学における生物学的アナロジーの使用を明確に批判している、2)ペンローズ以外の戦後の企業理論の展開も必ずしも生物学的とはいえない、3)ローズビーの著作(*Equilibrium and Evolution*, 1991をも含む)は進化を扱った重要な貢献であるにしても、それは進化を明確に定義していないし、ダーウィン主義的進化の立場に立つものでもない、と反駁している(G.M. Hodgson, "Economics and Evolution: A Reply to Laurence Moss," *Marshall Studies Bulletin*, 5, pp.41-50, 1995)。



ホジソン氏は、ヴェブレンと並んで進化経済学の始祖ともいべきマーシャルの進化概念を、スミス、ワルラス、メンガーなどと同じ「連続的」「個体発生的」なものと分類している。その理由は、マーシャルがダーウィンよりもむしろスペンサーの進化論やヘーゲルの弁証法の影響を強く受けている、とホジソン氏が解釈したからであろう。しかし、マーシャルの「経済生物学」というヴィジョンをこのように過小評価することで、その可能性までも切り落とすことにならないかがやはり気がかりである。叙述の晦渋さや概念のあいまいさにもかかわらず、制度派のヴェブレンを高く評価したことを考えると、より明晰な理論や分析を展開しようとしたそれ以外の経済学者に対して、ホジソン氏の点数が概して辛すぎるように思えなくもない。この問題の検討は今後の課題であろう。

また、ロスは先の論文で、本書が「有機体論的な説明 (organicist explanation)」を支持しており、全体論、さらには国家主義や人種主義への傾向を内包しているのではないかという危惧を表明している。このモスの論難は、いささかイデオロギー的なバイアスを帯びた性急な断定であるといえよう。けれども、ホジソン氏は、自らは規範言明である「有機体論的な説明」ではなく、事実言明である「有機体論的な存在論」を支持しているのであり、本書は前者とは無関係である、と冷静に反論している。多元主義を前提とする、こうしたホジソン氏の論争姿勢に学ぶべき点は多い。

ここでこのような応答を紹介したのは、日本でも本書に対して同じような批判や評価がなされる可能性があると考えたからである。本書の目的は、だれもが納得しうる妥当な学説史・思想史的な解釈を提示することにあるのでも、全体論の思想的・イデオロギー的立場を擁護するための議論を展開することにあるのでもない。「進化」概念という観点から主要な経済学者を取り扱った、第II部、第III部の経済学説史・経済思想史的な議論も、「われわれは各経済学者が抱える問題点を認識し、同じ過ちを繰り返すべきではない」という警句を込めてホジソン氏が書いた診断書であると受け取るべきである。その内容に異論や反論が出されることはホジソン氏も十分承知しているにちがいない。本書の最終的なねらいは、これをありうべき一つの見取り図として、現代経済学を形式主義や還元主義から救い出し、制度や進化という視点を重視する新たな理論的

アプローチを模索することにある。これは、ホジソン氏みずからの課題であるとともに、経済学者や経済学に関心がある者に対して、経済学を根本的に再構築しようではないかという呼びかけでもある。これを無謀な企てだとみなして言下に否定したり冷やかに眺めるか、それとも、これを試みる価値がある構想だと建設的に受け止めて応答しようと努めるか。読者に問われているのは、このことである。

#### 4) 本書の内容

ここでは、本書を読む際の指針を読者に提示するために、内容を各章ごとに要約して紹介する。

四部構成をとる本書は、内容的には、次のように大きく次の三つに分けられる。

- a) 進化経済学の哲学・方法・概念 (第I部「導入と概念」)
- b) 主要な経済学者たちの進化概念と進化経済学 (第II部「経済学における進化? : マンデヴィルからマーシャルまで」、第III部「経済学における進化? : 20世紀の三人の理論家たち」)
- c) 進化経済学のための「進化概念」の構築 (第IV部「進化経済学へ向けて」)

本書は、基本的には、全体を冒頭から通読することが望ましい。だが、経済学説や経済思想に関心のある読者は、第II部から読みはじめ、必要なときには第3章の分類を参照しながら読むこともできるし、また、とくに、現代経済理論と現代生物学の関係について関心のある方は第IV部から読むということもできるであろう。また、第II部と第III部の主要な経済学者に関する諸章は、特定のトピックの貯蔵所になっている。ダーウィン革命に関する第4章は個体発生と系統発生の違いを説明している。スペンサーに関する第6章はラマルク主義を概観している。ヴェブレンに関する第9章は累積的因果性に触れている。ハイエクに関する第12章は群選択についての問題を提起している、など。それゆえ、自分の関心があるトピックに関する章を適宜参照するという読み方もできなくはない。このように、本書はまさに読者の多様な読み方を許容する多元主義的で開かれた書物である。



## a) 進化経済学の哲学・方法・概念

ここでは、進化経済学の哲学・方法・概念が論じられる。方法論的・哲学的基礎に関する議論から出発し、制度や慣習の重要性、科学におけるメタファーやアナロジーの意義を再考する。また、新古典派経済学の機械論的メタファーと進化経済学の生物学的メタファーを対比したうえで、経済進化という概念の予備的分類を行っている。

第1章では、経済学の方法論的・哲学的基礎についての考察が展開される。ここでは、とくに新古典派経済学の還元主義、実証主義、数学的形式主義、方法論的個人主義、知的独占が批判的に検討される。これらの特徴は、哲学的に見れば、精神と物質、主観と客観というデカルト的な二元論に起源をもつ。その克服のためには、多層的秩序、有機体論的存在論を説くパース、ホワイトヘッドらの見解に耳を傾け、習慣・慣習、直観、信念、理論的多元主義を重視しなければならない。とりわけ、メタファーによるある言説(体系)から別の言説(体系)への移動を意味する、パースの「アブダクション」は、科学的創造性の源泉として注目される。それは、帰納とも演繹とも異なり、それらを補完する第三のカテゴリーであり、経験論と合理論を超える可能性を開いている。

これを受けて第2章では、科学におけるメタファーやアナロジーの意義が再考される。メタファーは単なる文学的装飾ではない。それは、異なる源泉をもつ構造化された概念群を有性的に結合して、新たな意味論的文脈を生み出し、また、われわれを揺さぶり新たな思考方法へと向かわせる発見的効果を発揮する。主流派経済学を支配しているのは古典力学の「機械論的メタファー」だが、その限界が明らかである以上、新古典派のハードコア概念にかわる見方を提供してくれる「生物学的メタファー」を採用すべきである。このことは、希少性、競争、利己主義、均衡という経済学の問題を生物学へと輸出しようとする「社会生物学」や「経済帝国主義」の考え方とは正反対である。

第3章では、「進化的」という用語の多義的な意味を整理するために、「経済進化」概念が類型学的に六つに分類される(本訳書 p.64の図3-1を参照のこと)。まず、大分類として、「発展的」進化と「発生的(遺伝的)」進化に分けられる。「発展的」進化は、進化を必然的な展開や段階的な発展とみなすが、必

ずしも進化過程の構成要素やメカニズムを記述しない。これに対し、「発生的」進化は、システムの構成要素単位(遺伝子のような)の相互作用をともなう緻密な因果説明を説明する。「発展的」進化は、「単線的」か「多線的」(マルクス、ホブソン)かに分けられる。一方、「発生的」進化は、「個体発生的」か「系統発生的」かに分けられる。個体発生とは、一組の遺伝子をもつ生殖細胞が特定の生物体へ成長していくことであり、系統発生とは、一定の個体群が内部構成あるいは遺伝子プールの変化をともなうながら変動することである。「個体発生的」進化はさらに、「連続的」(スミス、メンガー、ワルラス、マーシャル)か「断続的」(シュンペーター)に、「系統発生的」進化はさらに、「完結的」(スペンサー、ハイエク)か「非完結的」(マルサス、ヴェブレン)に細分される。「連続的」と「断続的」は、個体発生的進化が非連続的・断続的な変化をともなうか否かによって、「完結的」と「非完結的」は、系統発生的進化に最終的帰結(均衡/静止)を想定しているか否かによって、分類される。80年代に進化経済学のニュー・ウェーブを形成することになったネルソン＝ウィンターの進化経済モデルは、「個体群思考」に基づく非完結的系統発生論とみなされる。社会経済における系統発生的進化の選択の単位は、個人、習慣、ルーティン、制度、システムであり、変異は、突然変異や有性交配というよりむしろ、模倣、改良、獲得形質の遺伝、目的保有的行動が引き起こす迅速な浮動を通じて生み出される。このように、社会経済進化は生物進化に比べてよりラマルク主義的な性格をもつ。

## b) 主要な経済学者たちの進化概念と進化経済学

ここでは、経済学の成立から20世紀までの主要な経済学者——マンデヴィル、スミス、マルサス、マルクス、エンゲルス、スペンサー、マーシャル、メンガー、ヴェブレン、シュンペーター、ハイエク——が取り上げられ、彼らが自己の理論のなかで「進化」という概念をどのように使用してきたかを先の分類に則して逐一検討される。これは、経済進化の思想史的なフォローであるとともに、どのような進化概念を今後の経済学構築に活かしていくのかを考えるための準備作業である。進化概念の歴史的検討は経済学の理論的検討を含んでいる。

第4章は、マンデヴィル、ヒューム、スミス、マルサスのダーウィンへの影

響関係を考察している。マンデヴィルやスコットランド学派は、秩序と規則性が多数の利己的な個体から何の意識的な設計なしに発生するという考え方をダーウィンに伝えたが、彼らの進化は個体発生的であり、その影響は通常考えられているほど大きくない。ダーウィンの分業概念の源泉はスミスではなくて、バベッジに求めるべきである。ダーウィンにいつそう重要な影響を与えたのはマルサスの自然神学の考え方である。「生存闘争（競争）」を理論化したマルサスの『人口論』は、多様性・不純性と現実世界の完成不可能性を含んだ系統発生的進化を描いており、それはダーウィンに「自然選択」の概念を示唆することとなった。

第5章は、マルクスとエンゲルスがダーウィンからいかなる影響を受けたかを検討している。マルクスはダーウィンの『種の起源』に感銘を受けたが、ダーウィンの自然選択理論を受け入れたわけではなかった。マルクスとエンゲルスの階級闘争史観や唯物史観は段階的・革命的であり、彼らは共産主義をある種の調和的な静止状態と予想している点において完成可能性を信じている。彼らの進化観は、「発展的」であり、ダーウィンよりはむしろスペンサーに近い。

第6章では、生物進化と社会進化を包括的・総合的に論じたスペンサーの進化論が吟味される。スペンサーは、「進化」という語を普及させ、また「最適者生存」という標語を発明して、ヴェブレンやマーシャルに大きな影響を与えている。フォン・ペーアの後成説の影響を受けたスペンサーの進化概念は、同質で一般的なものから異質で複雑なものへの、連続的な差異化により生じる変化を意味している。差異化と統合化を特徴とするスペンサーの進化は、自然選択過程としてのダーウィンの進化と同じではない。多様性は、ダーウィンにとって自然選択に不可欠な燃料だが、スペンサーにとっては進化の目的論的な結果なのである。また、スペンサーは、ラマルクの獲得形質の遺伝や用・不用説を受け入れていた。進化とは、スペンサーにとって、理想の完成へ向かっての進歩であり、まさに「系統発生は個体発生に接近する」。また、スペンサーの存在論は、一般に信じられているような有機体論ではなく、原子論・機械論である。

第7章は、新古典派経済学の総合者であるマーシャルの進化論に対する両義的な立場を考察する。マーシャルは、『経済学原理』の序文で「経済学者のメ

ックは経済生物学である」と述べたが、彼の経済学の内容は本質的には力学的アナロジーに基づくものである。マーシャルは、収穫逓増と時間の不可逆性といった論点では「有機的アナロジー」の重要性を認識したけれども、ダーウィンではなく、スペンサーから大きな影響を受けたため、十分な進化的分析を果たせなかった。有名な「代表的企業」の分析は、「個体群思考」よりもむしろ「類型学的本質主義」の典型であり、その応用としての長期均衡分析も力学的・還元主義的である。マーシャルの経済生物学はいまだ青写真であり、果たされない約束であった。

第8章は、オーストリア学派の創始者であるメンガーの貨幣進化論を対象にしている。メンガーは、貨幣を「有機的」社会制度、すなわち人間の行為の産物ではあるが、人間の設計の産物ではないものと見ていた。各商品は、その販売可能性において異なっており、最も容易に販売されうる諸商品は、交換行為における個人の認知や行為を媒介にして、また習慣の確立を通して、累積的にその販売可能性を高めていく。貨幣は、このようなポジティブ・フィードバックをもつ進化過程の結果として発生する。しかし、「遺伝物質」に相当する個人の目的と選好は与件とされており、競合する通貨単位間の選択的進化過程が存在しないので、これは個体発生的である。ここではさらに、メンガー貨幣論に関連する現代の分析や議論——経路依存性、法的規制、品質と評判、国家・中央銀行の役割——も取り上げられる。いくつかの類似性にもかかわらず、個人やルールを所与とし、制度を進化の結果と見ている点で、メンガーは制度派と異なる。

第9章は、ヴェブレンが目指した「ポスト・ダーウィン主義経済学」に焦点を当てている。ヴェブレンがダーウィン主義的進化のメタファーを採用したのは、第一に、資本主義経済の技術や科学の進歩に着目し、均衡へと収束しない累積的な動態過程を理論対象としたからであり、第二に、社会において遺伝子や自然選択に類比的な概念を構成しようとしたからである。ヴェブレンによれば、人間行動は、本能だけでなく、人間の文化や習慣的行為により形成される思考習慣により支配されている。技能も、ルーティンとなった実用的知識やノウハウの集合である。多数の人々に模倣・複製され、固定化された思考習慣である制度やルーティンこそ、社会経済的進化における遺伝子に相当するもので

あり、選択単位なのである。ヴェブレンは、スペンサーと異なり、選択の前提として個体群内の多様性を想定し、創造的革新を生み出す「むだな好奇心」を新奇性と変異の主要な源泉として導入した。それゆえ、彼は社会の完成可能性を拒否し、人間の性質と環境の双方を累積的・自己強化的な因果過程の結果として理解した。ヴェブレンは、体系的な理論を打ち立てることはなかったが、ダーウィン主義を生物学的メタファーとして経済学に組み入れた点では相対的に成功しており、この意味で現代進化経済学の創始者の一人といえる。

第10章は、今日の進化経済学の先駆者といわれているシュンペーターを取り扱っている。「方法論的個人主義」という用語をつくり出したシュンペーターは、還元主義的な分析と市場の自己調整メカニズムを信奉していた。このため、シュンペーターは、経済発展を分析する動態論への起点に、ワルラスの一般均衡分析を置いている。ワルラスは進化的アプローチとは正反対の静態論を展開したと考えられているが、彼の著作には、技術や嗜好の内生的变化、企業者やイノベーションという動態的概念がすでに存在した。シュンペーターは静態論を動態論と調和させようとしたが、それは論理的な不整合を含んでいるため必ずしも成功していない。シュンペーターにとって進化とは、体系の内部から発生するイノベーションが均衡を攪乱する、不連続的で飛躍的な過程であり、マクロ的成長とは異なる質的「発展」や構造的「変化」を意味していた。それは、マルクスの「弁証法」的で発展的な考えに近く、ダーウィンのあるいはラマルクの選択過程の進化ではない。1980年代以降のネオ・シュンペーター主義は、自然選択のアナロジーを使用しているため、その名前にもかかわらず、実際にはヴェブレンや旧制度派に近いのである。

第11章と第12章は、現代オーストリア学派を代表するハイエクの進化的アプローチを検討する。

第11章では、主に方法論的個人主義との関連が議論される。ハイエクの社会経済的・文化的な進化概念は、法理論、政治経済構造、市場の本質、社会主義や「設計主義」の批判といった広範なテーマに関わっているものの、それが展開されたのは、彼の晩年にあたる1960年代以降にすぎない。ハイエクは、みずからの進化概念の系譜的な起源をメンガー、スミス、ヒューム、マンデヴィルへとさかのぼった結果、マルサスとダーウィンの意義を過小評価することにな

った。ハイエクの進化概念は選択過程を含む系統発生的なものではあるが、方法論的個人主義とスコットランド学派の思想に依拠しているため、多くの点で個体発生的な傾向を帯びている。文化の自律性、制度・慣習・ルールを選択的進化の自律性を強調するハイエクの進化主義は、社会ダーウィン主義や社会生物学の還元主義批判においては成功しているものの、個人とルールのどちらが遺伝子に相当するのかという問題を残している。かりにルールが複製子かつ指示子だとすると、方法論的個人主義との間に不調和が生じる。ルールの複製メカニズムとして、他者の模倣を挙げているが、これは、方法論的個人主義が示唆する個人の目的保有的行動や真の選択と矛盾する。また、ルールが諸個人の行動の明示的な規則性を意味するにすぎないならば、ルールではなくむしろ個人が指示子になってしまう。環境の構造的な変化をともしう社会的文脈では、ルールも個人も長期的な安定性をもつ遺伝子に厳密に対応するものではないのである。

第12章は、ハイエクの中心概念である「自生的秩序」と群選択との関連、ならびにハイエクの政策観を検討し、付録は、現代生物学における群選択理論を概説している。ハイエクは群選択の概念を取り入れ、習慣やルールは、それを保持する特定の集団（群）の効率性を通じて、間接的に選択されると主張するが、これは機能主義的な説明であって、選択メカニズムを明確にしていないし、そもそもハイエクの方法論的個人主義と矛盾する。個体群はその内部の諸個体が機能的に組織され、強く連結されているとき、群選択の作用を受ける実在物になる。群選択は、社会経済領域における制度・ルール・規範・文化に対して存在する可能性が高い。制度や文化は、構造化され相互作用する「信念・行動システム」であるため、個々の人間のなかに位置づけることはできない。また、組織的知識は、個々の成員の交替にもかかわらず、長期にわたり構造内部で保持される。市場は特定の秩序なのか、あらゆる秩序の進化的選択が生じる一般的文脈なのか、また、ハイエクの市場像がいかに群選択や自生的秩序の議論と整合するのかがあいまいである。また、自生的秩序と対になるべき自生的無秩序に言及していない点で、社会の完成可能性を説いたスペンサーに類似する。しかし、系統発生論の見地に立つならば、市場自身も社会制度であり、それゆえ非市場的制度と並んで、進化的選択の対象であると考えなければならない。

ハイエクは、自由主義的な「大きな社会」を提唱し、設計主義的な合理主義に反対してきたが、1990年代の旧東側諸国における市場化改革では、政治的「干渉」による市場化改革という「設計主義」に荷担したことで、自己矛盾を犯した。ここでは、ハイエク主義は全体主義的自由主義に接近している。

### c) 進化経済学のための「進化概念」の構築

#### (第IV部「進化経済学へ向けて」)

ここでは、改めて現代経済学の問題点が検討され、進化経済学がどのような進化概念を基盤にすべきかが考察される。現代の物理学、化学、生物学における最新の知見——非平衡熱力学、カオス、複雑系、断続平衡、群選択——を参照しながら、最適化、不確定性と意図、還元主義について論じている。「代替的」な理論が提示されているわけではないが、現代経済学がどのような方向へ進むべきかという指針は明確に与えられている。

第13章では、進化と最適化の関連が再検討される。環境への適応が生じている以上、自然選択は大まかな改善をもたらす。だが、自然選択は普遍的最適化を行う主体であるとの主張は、「適応主義」的な誤謬を犯している。それは、(1)選択と生存、(2)繁殖力と新規参入者、(3)経路依存性、(4)ロックインとクレオド的發展、(5)文脈依存性と頻度依存性、(6)複数の、シフトする適応ピーク、(7)臨界的多数と非推移性など、いずれの観点から見ても正しくない。それゆえ、自然選択の概念により最大化行動仮説を正当化しようとするハイエクやフリードマンの試み、あるいは、資本主義的競争は進化過程のように働き、効率的な産業組織上の制度形態・様式に対して有利に作用するという、イェンセン、メクリング、ノース、ウィリアムソンの見解は、いずれも根拠薄弱である。経済的文脈では、進化過程は必ずしも最適な帰結をもたらさないで、レッセ・フェールは必ずしも正当化されない。むしろ限定的な国家介入や経済計画は可能であり望ましいといえる。

第14章では、進化的アプローチに不確定性と意図という概念を導入しようとする、新たな理論的枠組みが提示される。現代のネオ・ダーウィン主義は、進化をランダムな突然変異と自然選択により説明しており、経済学がしばしば強調してきた選択における目的保有性と意図を完全に排除している。新古典派経

済学は理論的には決定論的であり、個人を不変の選好関数と信念をもち、客観的制約下で効用を最大化する機械とみなしている。目的や意図の問題を取り扱うためには、目標の変更を含む「目的保有性」と、目標が固定されている「目標指向性」を区別し、前者の視点から、新奇性や創造性を可能にする非確率的な不確定性を導入しなければならない。とはいえ、人間の想像・選択・行為は、文化的・制度的環境により枠づけられた過去の思考習慣に拘束されており、その不確定性は部分的なものでしかない。習慣は、目的保有的行動を制限するとともに、それを可能にするという両面性をもっており、意識にも自然にも還元不可能な実在物である。結局、慣習と制度的ルーティンは、いくつかの重複する、多層的な階層構造をなしており、異なる程度の目的保有性や因果性を内包する。こうして、目的と決定論、因果性と進化という二分法は調停されうる。

第15章では、主流派経済学の原子論的・還元主義的世界観と、そこに内包される存在論的・方法論的諸問題が主題的に論じられる。原子論の特殊形態としての個人主義はその誕生以来経済学における主要な思考様式であったが、特に1870年代以降に興隆した新古典派経済学によって強化され、新古典派以外のオーストリア学派や分析的マルクス主義によっても支持されている。だが、経済学のミクロ的基礎づけという企ては、個人の多様性を想定すれば一般均衡の一意性・安定性は得られないという結論によって挫折した。また、カオス理論は、非線形モデルの初期値に対する過敏性のために、信頼しうる長期予測が不可能であることを明らかにし、また、システムの還元不可能性を示した。他方で、生物学還元主義には計算上の困難がつきまとうし、複雑系に関するサイモンの「準分解可能性の仮説」は一般には成立しない。これらの帰結は、原子論的存在論が根本的に破綻したことを意味する。還元主義に関する最も深刻な問題は、異なる分析レベル上での諸概念間の移動という論点である。階層の各レベルにあるシステムやサブシステムは、全体としての自律的特性と部分としての従属的特性という二重性をもつ。全体は、諸部分の総和以上のものであるだけでなく、ある程度まで諸部分の特性を決定する。それゆえ、構成要素の知識からは予想できない新たな全体の特性が出現するという「創発性」こそ、複雑で階層的なシステムの根本的な特質である。単純な非線形関数から生み出されるストレンジ・アトラクターは、複雑な形状をしており、ランダムで予測不可能に見

えるシステムのふるまいもその内部に拘束されている。また、複雑系では、カオスの相互作用から自己組織化と秩序が生じうる。カオス理論は、カオスと共存する秩序や構造の可能性を提示しているのである。非還元主義的・非決定論的な代替アプローチは、ホワイトヘッドの構造化された創発的階層という存在論に基づき、階層の相互連結と相対的分離をともに重視すべきである。

最後の第16章では、本書の主題である「経済学でいかに生命という主題を回復し、そうすることで危機の状態にある経済学を再生するか」という問題を改めて考えている。経済学は、分析を基礎づけるための有意味で操作可能な不変性をもつ原理を、ヴェブレンなど旧制度学派のいうところの社会的制度に求めなければならない。定型化された行動パターンや思考習慣である制度は、相対的不変性と自己強化性をもっており、ミクロとマクロの両場面へ適用される。制度はまた、重複する諸階層として存在し、垂直的構造と水平的ネットワークを補完的に形成する。もちろん、経済進化は、ミクロ・レベルの急速な変化や多様性とマクロ・レベルの相対的安定性をもつ点で生物進化と異なっており、それゆえ、それはクレオド的発展に近い。しかし、それは非決定論的で、しかも最適性も安定性も保証されていない。マクロ経済学の非還元主義的な自律性は、個体群思考と高次の分析レベルの双方に注目すれば、固有な制度構造の存在とその構造的安定性から導かれる。構造的に安定な中間期にはマクロ経済的なモデル化や推定が可能だが、制度変化や構造崩壊の時期にはそうではない。科学的理論におけるこうしたアドホックさは完全には回避できないものである。構造化された創発的階層という存在論はこのアドホックさをむしろ擁護する方法論を支持するのである。

## 訳者あとがき

私は、1996年3月から半年間、イギリスのケンブリッジ大学に在学研究のため滞在していた。ケンブリッジのある書店に立ち寄ったとき、平積みされていた本書のペーパーバック版に出会った。以前から、ホジソン氏の著作に関心をもっていただけ、ハードカバー版は日本ですでに購入していたのだが、本書が進化経済学の教科書として欧米で広く読まれているのを知ったのはそのときである。主要な経済学者を進化概念で分類し、進化経済学の今後を展望するという本書の主題はきわめて新鮮であり、また魅力的であった。帰国後、さっそく大学院の演習で学生とともに本書を通読したが、彼らも本書を通して進化経済学に興味を示してくれたことを知り、これを翻訳しようと思いついたのである。折しも日本では進化経済学会が設立されたばかりであり、進化経済学に対する興味も高まっていたときであった。

だが、本書のように、いくつかの専門分野を横断する議論を展開する著作の翻訳には特有の困難が待ち受けていることが予想された。

まず、本書が扱っている専門領域は、経済理論や経済学説史をはるかに超え、哲学や経済学方法論、進化論や現代生物学、カオス理論や複雑系に至るまで、きわめて多岐にわたっている。訳者には、担当箇所範囲内でも、いくつかの分野について、ある程度の専門的知識が要求されることになる。

また、翻訳作業自体にも難関があった。本書には、多層的で複雑なメタファーとアナロジーのネットワークがアブダクションのための装置としてあちこちに巧妙に仕掛けられている。それらをできるだけ保持しながら、文字、統語論、意味論においてまったく異なる日本語という言葉の網の目に移し変えなければならない。われわれは、翻訳という作業の本当のむずかしさにたびたび出くわすことになった。

まず、同じ英単語が日本の各専門分野ごとに別様に訳されている。たとえば、'equilibrium' は、物理学や化学では「平衡」、経済学では「均衡」、また、'indeterminacy' も量子論では「不確定性」、哲学では「非決定性」のように訳されている。また、'class struggle' はマルクス主義では「階級闘争」と訳されているのに、'struggle for existence' は「生存競争」と訳され、現在ではそれが普及している。前者の例では、訳者が自らが属する分野の独自性を出そうとして、あるいは他分野の概念の導入を隠蔽しようとして、このような訳し分けをしたように感じられるし、後者の例でも、「競争」に比べ「闘争」がもちうる、かなり峻厳な響きを和らげようとした訳者の意図が感じられる。あくまで推測にすぎないが、このことは、日本における学問の成立過程や社会ダーウィニズムの導入過程にも深い関連があると推測できる。いずれにしても、同じ単語を経済学、哲学、生物学、物理学など各分野で別の単語に訳し分け、それが定着した結果、欧語圏では当初から存在し、現在も意識されている、異分野間の相互作用を含む意味のネットワークが寸断され消されてしまっている。そのため、各専門分野の翻訳を読むだけではもはやそのことを理解する手がかりが失われているのである。そして、このことが日本語においてメタファーやアナロジーを介して各分野が相互作用し、新たな意味や概念を見出す営みにとっての大きな障壁にもなっている。このような問題を少しずつでも是正する必要があるのではないかと考え、慣例的表現に従わなかった場合もある。

これ以外にも、翻訳を困難にする例があった。同じ英単語を文脈によって訳し分ける必要がある場合（例えば、'selection' を、意思決定の意味での「選択」、自然選択の意味での「選択」、排除するという意味での「淘汰」などに、あるいは 'genetic' を「遺伝的」と「発生的」に訳し分けるなど）、慣例の訳では原義が伝わりにくい場合（たとえば、通常「適者生存」と訳される 'survival for the fittest' は、経済学の最適化原理との関連で使われているときには「最適者生存」と訳す必要がある）、日本語に訳出が困難な場合（'abduction'、'retroduction'、'retrodiction'、'chreod'などの単語）、などである。

訳文は自然に読める日本語の文章であることが望ましいとは思いますが、このような事情から、必要と思われる単語には初出時に原語を記載して、著者の仕掛けを壊さずにさまざまな問題を回避するように努めた。

こうして、訳語の統一を図るために訳語表を作成し、1998年3月には翻訳チームが結成された。しかし、各担当者が実際に訳文を作成する過程でも、訳語の選択や統一についてしばしば難しい問題が生じた。また、原文の意味が両義的であったり、あるいは理解が難しい箇所もあった。これらについては、ホジソン氏に直接問い合わせ、丁寧な回答をいただいた。このような事情で、訳文の完成は予想以上に遅滞してしまったのである。

訳者の担当箇所は巻末のとおりである。最終的に全体の訳語や訳文の調子を統一するため、私が各担当者から提出された訳文を見直し、必要な修正を施して、各担当者にそれぞれチェックしてもらった。そのため、訳文に対しては各担当者とともに私も責任を負っている。できるだけ原書の内容を忠実に伝達することを第一義と考え、やや生硬であるにしても正確な訳文づくりに努力したつもりである。とはいえ、思わぬ誤りもあるかもしれない。読者諸賢のご批判とご叱正を賜りたい。

訳者一同、本書が日本における経済学の進化と、自然科学・社会科学の諸分野の異種交配に寄与することを祈願している。

北海道大学大学院経済学研究科の加地直樹君、吉地望君、黒瀬一弘君、貞包寿美さん、成田泰子さん、浜矢浩司君、橋本千津子さんは、参考文献の邦訳書リスト作成に協力してくれた。また、このうちの何人かは前述した大学院演習に参加し、いくつかの章の下訳を試みてくれた。ここに記して謝意を表したい。

最後に、本書の全訳出版を実現していただいた東洋経済新報社の御厚意に感謝したい。また、進化経済学に関心を示され当初編集を担当された高井史之氏、本訳書をできるだけ読みやすいものにするため編集作業に努力していただいた中山英貴氏には厚くお礼を申し上げる。

2003年3月

訳者を代表して 西部 忠